

200937071A

厚生労働科学研究費補助金

地域医療基盤開発推進研究事業

看護基礎教育の充実および看護職員卒後研修の制度化に向けた研究

平成 21 年度 研究報告書

総括

研究代表者 中山 洋子

平成 22 (2010) 年 3 月

厚生労働科学研究費補助金

地域医療基盤開発推進研究事業

看護基礎教育の充実および看護職員卒後研修の制度化に向けた研究

平成 21 年度 研究報告書

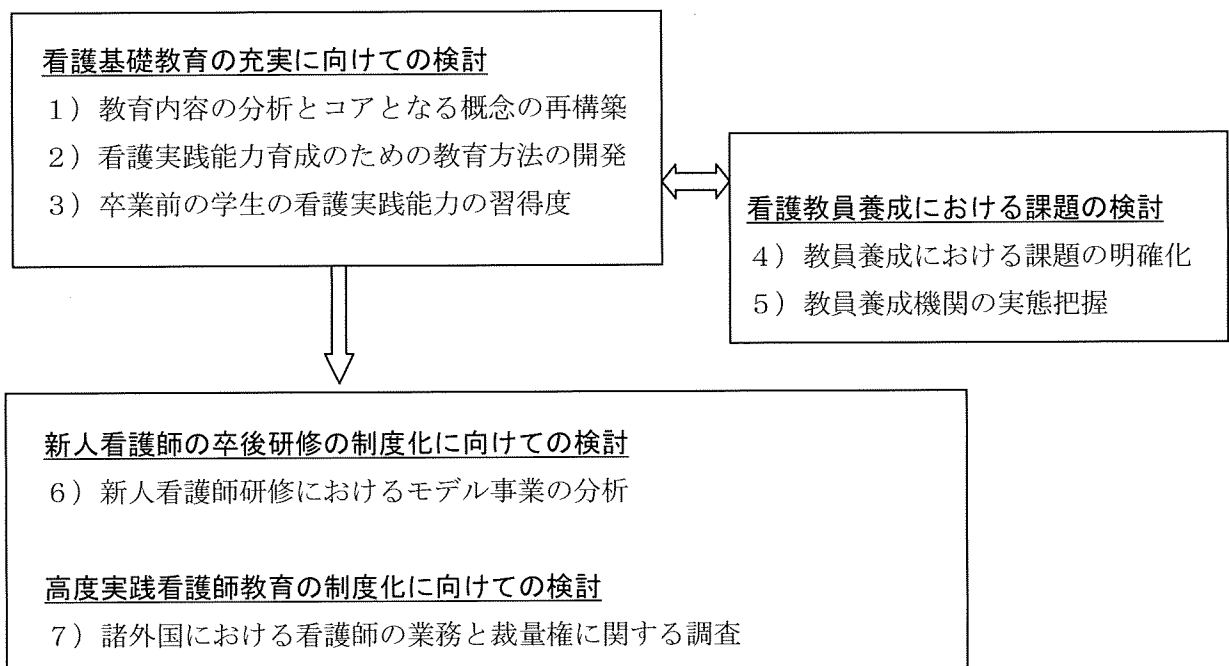
本研究の概要と報告書の構成

本研究は、社会の変化に対応できる看護専門職の育成に向けて、①看護基礎教育の充実に向けての検討、②看護教員養成における課題の検討、③新人看護師の卒後研修の制度化に向けての検討、④高度実践看護師教育の制度化に向けての検討を行い、看護基礎教育と看護卒後教育のあり方の検討の基礎資料を作成することを目的としている。少子化が進む中で、質の高い看護ケアを提供できる看護師の育成と確保は、わが国の厚生行政においては重要課題であり、将来の保健医療政策や看護教育の充実に向けての基礎資料を作り、蓄積していくことが求められている。こうしたことから、看護基礎教育・教育を担う看護教員の養成・看護卒後教育という一連の流れの中で、系統的、総合的な調査研究を行うことの意義は大きいと考える。

研究全体は、研究代表者、研究分担者が、それぞれの研究課題を担当し、実態調査を中心に進めていったが、下記のように大きく3つのブロックに分かれていることから、報告書ではその成果を、「その1：看護基礎教育の充実に向けての検討」、「その2：看護教員養成における課題の検討」、「その3：新人看護師の卒後研修および高度実践看護師教育の制度化に向けての検討」としてまとめた。今後、本研究によって得られた成果を基に、それぞれの課題についてさらに検討し、内容を深めていきたいと考えている。

本研究の成果は、多くの方々の協力によって生み出されたものである。研究の過程で研究協力者として参加していただいた看護職の方々、また、研究対象者としてご協力を下さった看護職および看護学生の方々に心から感謝を申し上げます。

(研究全体の構成)



目 次

報告 その1：看護基礎教育の充実に向けての検討

- I. 看護基礎教育における教育内容の分析と
コアカリキュラム作成に向けての概念の再構築
ーその1：看護基礎教育においてコアとなる概念の検討ー 1
研究代表者 中山 洋子（福島県立医科大学）
- II. 臨床場面に応用できる看護実践能力の育成を目指す教授・学習方法の開発
分担研究者 山内 豊明（名古屋大学）
1. 生体シミュレーターを用いた呼吸音聴取練習の
効果的な教育法についての検討 25
2. 生体シミュレーターを用いた心音聴取練習の
効果的な教育法についての検討 45
- III. 看護基礎教育卒業前の学生の看護実践能力の
習得度に関する研究 67
分担研究者 小山 眞理子（神奈川県立保健福祉大学）

報告 その2：看護教員養成における課題の検討

- IV. 「看護教員養成講習会」における看護教員養成の現状と課題 103
分担研究者 衣川 さえ子（厚生労働省看護研修教育センター）
- V. 看護教員の養成とキャリアアップに必要な教育システムの
再構築に関する研究 179
分担研究者 永山 くに子（富山大学）

報告 その3：新人看護師の卒後研修および高度実践看護師教育の制度化に向けての検討

- VI. 新人看護師研修におけるモデル事業の分析 211
分担研究者 坂本 すが（東京医療保健大学）
- VII. 諸外国における看護師の業務と裁量権に関する調査 279
分担研究者 山本 あい子（兵庫県立大学）

報告 その1 : 看護基礎教育の充実に向けての検討

看護基礎教育における教育内容の分析と

コアカリキュラム作成に向けての概念の再構築

— その1：看護基礎教育においてコアとなる概念の検討 —

研究代表者 中山洋子（福島県立医科大学）

研究の要旨

研究目的：本研究は、看護基礎教育のなかで重要と考えていることや必要としている学習内容は何かを見直し、看護基礎教育のコアとなる概念を抽出することによって、コアカリキュラム作成に向けての資料を提供することを目的とする。

研究方法：看護学校より募集した研究協力者175名に紙面にて、①看護学校3年課程の教育のなかで、あなたが最も大切にしていることは何ですか、②あなたが考える学生の卒業時の到達目標を5つ（5つ以内）あげてください、③あなたの専門領域においてどうしても学生に学んで欲しいことは何ですか。重要と思われる内容を5つ（5つ以内）あげてください、④看護基礎教育で習得すべき項目を5つあげて下さい、を質問し、記述された内容を分析した。また、紙面での調査に回答を寄せた研究協力者13名による研究協力者会議を開催し、看護学校の教育現場で起こっている問題と、紙面による調査を基に作成した資料について話し合った。

結果および考察：収集した調査結果をまとめてみると、看護基礎教育において「人間としての成長・成熟度」「看護技術（知識・技術・態度）」「看護実践能力」の3つのコアとなる概念を取り上げることができた。看護基礎教育における最終目標は学生が看護実践能力を習得することであるが、そのためには主体性や高い倫理性をもった人間としての成長が基盤となり、そこから看護に必要な知識・技術・態度を養うことができれば、臨地実習を通して看護実践能力を習得していくことができると考えられる。また、看護実践能力を習得していく過程で、看護技術や知識を自分のものとし、看護実践を通して人間としての成長を図っていくことができると考えられる。この3つのコアとなるものを連動させながら学生が看護師として成長していくことができるように支えていく、これが看護基礎教育の基本であると考えられる。

1. 研究の背景と研究目的

わが国の看護師教育のカリキュラムは、保健師助産師看護師学校養成所指定規則（以下、養成所指定規則）に定められている教育内容に基づいて行われている。現行のカリキュラムは、人のライフサイクルに焦点を当てて看護学を体系化したもので、1967年の養成所指定規則の改正によってつくられた教育内容、「看護学総論」「小児看護学」「成人看護学」「母性看護学」の4本の柱から成り立っていた。そして、1967年改正のカリキュラムは、健康を基盤として、健康のあらゆるレベルにある状態を学ぶことを基本として編成され、看護というものを医療だけではなく、保健の働きをも含めた「総合看護」、すなわち、Comprehensive Nursing という考えに基づいていた。

この1967年のカリキュラム改正では、看護の概念を明らかにし、体系化する試みを通して看護学を医学とは異なる視点をもつ独自の学問分野であることをめざしたと考える。さらに看護教育は、“身体で覚える看護”から“頭で考え行動する看護”へと転換し、trainingからeducationへと看護教育は歩んでいったのである¹⁾。

その後、時代の要請に応じて養成所指定規則は、教育内容を増やしていった。1989年の改正では「老年看護学」を加え、1996年の改正では、「在宅看護論」「精神看護学」を追加した。看護学の体系は、「基礎看護学」「在宅看護論」「成人看護学」「老年看護学」「小児看護学」「母性看護学」「精神看護学」の7本の柱になって今日に至っている。

このように看護学の教科目とその内容は増えていったが、3年の養成期間は変わらず、教育内容の過密が問題になっている。さらに、医療の高度化、複雑化、患者の高齢化と入院期間の短縮など、臨地実習の場においては、高い看護実践能力が必要になってきている。さらに、少子化の時代を迎え、看護系大学の急増などの影響もあって、看護学校入学者の教育背景や年齢はさまざまになってきている。こうしたことから、看護教育は学習者の個性に応じた学習方法が求められるようになってきている²⁾。看護教育はteachingからlearningへの方向転換を余儀なくされているといえる。これは、増え続ける知識を教授する教育から、学生が学ぶ方法を学習する教育への転換を意味するものであり、そのためには増大した看護学の知識体系を再構築し、コアとなるカリキュラムを明確にしていく必要があることを示唆している。

本研究は、看護基礎教育のなかで重要と考えていることや必要としている学習内容は何かを見直し、看護基礎教育のコアとなる概念を抽出することによって、コアカリキュラム作成に向けての資料を提供することを目的とする。

2. 研究の方法

本研究は、従来の研究という手法を使わず、現在、看護学校で教えている看護教員を研究協力者として募り、その研究協力者と検討を重ねながら、討論内容を集約し、教育内容の分析とコアカリキュラムの再構築を試みようとするものである。そのために質問紙によって意見を収集し、その結果をまとめて資料を作成しては討論を重ねてコアを抽出していくという方法をとった。研究者と研究協力者との相互作用によって、作業過程を共有し、看護基礎教育についての意見を交換しながら、目的に向かって進んでいくという方法である。したがって、本研究は以下の手順を踏みながらすすめていった。

1) 研究協力者の募集

看護学校406校をリストし、調査の協力を依頼した。本研究の趣旨を明記し、研究協力ができるかどうか、出来る場合は研究協力者をリストして欲しいと看護学校の責任者に依頼した。その結果、115の看護学校から、277名の教員の応募があった。

2) 第1回目の紙面による意見の収集

第1回目は、紙面による調査とし、3年制課程の看護学校において看護教員が何に重点をおいて教育を行っているのか、教育理念、卒業時の到達目標、教科科目の内容、看護師としての能力等についてその実態を明らかにすることを目的に実施した。研究協力者として登録された277名に郵送し、175名から回答が返ってきた。

調査期間は、2010年2月10日～2010年3月12日であった。

紙面による調査のお願いにあたっては次のことを明記した。

①第1回目の回答に際しては、名前がわかるようになっているが、結果はすべて統計的に処理するので、個人が特定されることはない。

②本研究においては、コアカリキュラムの中核となる概念を抽出するという作業を一緒に行っていくために、プロジェクトメンバーとしての参加を依頼した。そのために、研究協力者となることの承諾書への署名をお願いするが、承諾書を提出しても参加は自由意思で、都合でいつでも取りやめることができ、参加を取りやめることで不利益を被ることはないことを明記した。

3) 研究協力者会議

調査結果をもとに、質問に対して回答をし、研究協力の承諾書を送付してきた研究協力者の中から47名を選び、2010年3月6日(土)の13:30~16:00の会議に出席できる者を募った。募集期間が短かったため、募集する地域として東京を拠点に、鉄道等で、3時間位の時間で来ることができる距離の看護学校を便宜的に選び、連絡をした。その結果13名が参加した。

3. 研究の結果

1) 紙面による意見の収集

(1) 研究協力者の背景

回答をした175名の研究協力者の背景は資料1に示した。

看護師としての臨床経験は、平均11.2年で、最も少ない者は3年、最も多い者は33年であった。看護教員としての経験は、平均12.3年で、最も少ない者は1年、最も多い者は32年であった。

専門領域については、基礎看護学が58名、成人看護学が26名で、基礎看護学・成人看護学の2領域を専門としている者7名を含めると、基礎看護学、成人看護学を専門領域とする教員が91名となり、研究協力者の半数を占めていた。

(2) 教育の中で最も大切にしていること

第1回目の紙面による調査の最初の質問項目は「看護学校3年課程の教育のなかで、あなたが最も大切にしていることは何ですか」と自由記載で述べるものと、キーワード3つをあげるものであった。キーワード3つを分類したものが資料2である。

「学生の成長」、「学生の学び」が多く、「看護への関心」などを含めると、学生に関するものが上位を占め、「対象理解」や「看護技術に関すること」が続いている。

(3) 卒業時の到達目標

「あなたが考える学生の卒業時の到達目標を5つ(5つ以内)あげてください。」という問いに対して記載された内容をまとめ、カテゴリ化すると、資料3のようになった。「根拠に基づく看護過程の展開/問題解決過程」が最も多く、その内容をみると「科学的根拠に基づく看護過程の展開」「個々の健康レベルに合わせた看護過程の展開」「問題解決過程」など、看護過程の展開に関するものであった。次が、「看護技術、知識に関すること」で態度や安全・安楽の問題も含まれていた。注目することとしては、「教育の中で最も大切にしていること」と関係しているが、「学生の人間性に関すること」も多く、自己理解、思いやりの心、豊かな人間性、などが含まれていた。

(4) 専門領域で学んでほしいこと

研究協力者に対して、専門領域を尋ね、「あなたの専門領域においてどうしても学生に学んで欲しいことは何ですか。重要と思われる内容を5つ（5つ以内）あげてください。」と質問した。分野別の内容を資料4にリストしたが、全体的には、基礎看護学領域では、「看護技術／日常生活援助技術」「人間の理解／看護の対象の理解」「看護における倫理」であった。成人看護学領域では、「健康レベルに応じた看護」に重点がおかれ、小児看護学領域や母性看護学領域では、「成長発達」や「ライフサイクル」に重点がおかれていた。また、小児看護学領域では、子どもの人権問題、母性看護学領域では、生命倫理の問題が取り上げられていた。高齢者看護学領域や在宅看護学領域では、「社会保障制度」や「地域の社会資源の活用」「他職種との連携」など他には見られない内容があった。精神看護学領域では、「援助の人間関係」や「対人関係」など人間関係に重点がおかれていた。成人看護学、小児看護学、母性看護学、高齢者看護学、精神看護学とそれぞれの対象の特徴と疾患についての医学知識は必要になるが、看護学の重点のおき方には特徴が表れていた。

(5) 看護基礎教育で習得すべき項目

厚生労働省の「第2回看護基礎教育の内容と方法に関する検討会」で出されたイメージ図（図2）を示し、「この中から看護基礎教育で習得すべき項目のうち、優先順位が高いものから5つ選んで記入して下さい。」と質問した結果が、資料5である。回答者の中には、言葉の意味がわからなかったので選ばなかったという場合もあるが全体的には、「人間性育成のベースとなるもの」「倫理性」が多かった。さらに「自分が考えていることを伝えられる能力」も多かった。1位から5位までを合わせてみると、「解剖学・生理学」「医学的基礎力」「フィジカルアセスメント力」など、人間の身体に関する知識・能力が比較的上位にあげられていた。

2) 研究協力者会議

研究協力者会議では、看護学校の教育現場で起こっている問題と、なぜ、看護教師が看護基礎教育で重要と考えている問題として学生の人間としての成長の問題が大きいのかについて話し合った。その結果として以下の点が明らかになった。

(1) 学生の教育背景の多様化

①学生のレディネスの低さ

- ・基礎学力がないままに看護学校に入学してくるので、自分の生活を整えるところからの指導が必要となっている。
- ・看護技術を身につける以前に、生活力が乏しい。
- ・生活が便利になっているので、安全・安楽、清潔・不潔などのイメージができない。

②学生の背景の幅広さ

- ・社会人入学者のなかで、他分野の学士や修士を有する学生が増えてきている。それぞれに合わせてどのような教育をすべきか迷う。レベルを分けて教育をしなければならぬところまで来ている。
- ・多様なのはよいが、どのようにどこまで個々の学生に対応していくのか、教員がついて行けないのが現状である。

(2) 精神面での弱さ

- ・人と人との関係を作っていくのが困難になっている。他者との関係性が希薄で、患

- 者・家族との関係のみならず、同級生との関係も作れない学生がいる。
- ・人との関係の中で傷つきやすい学生が多く、休学、精神科受診して治療を受ける学生も多く、最終的には退学する場合もある。
- ・実習で悩んだときにも教員や指導者に自らが相談できず、助けてもらうのを待っている状態である。
- ・自分で自分の進路を決められず、教員が振り回されている。

(3) 知識の活用—教育方法の改善・工夫

- ・知識を実践に生かしていく積み重ねができない。学習の積み重ねが出来ない。どのように主体的に学べるようにしていくかが課題である。
- ・書き方が重視され、記録用紙を埋めることができても、看護過程に基づく記録が書けない。
- ・詰め込み式の学習で、国家試験に合格させることが優先され、自己教育力を高める学習ができていない。
- ・解剖学、生理学、フィジカルアセスメントを学んでも、知識を看護として統合していく力が弱くなっている。
- ・単位の取得に重きをおいている学生も多く、学生の学ぶ姿勢が受動的である。高校までの与えられる学習が影響している。
- ・体験を通して学び、そのことを自分の言葉で表現することが出来るような教育展開をすることで、看護への関心を高め、人間性を育んでいく。

4. 結果のまとめと考察

以上、「教育の中で最も大切にしていること」「卒業時の到達目標」「専門領域で学んでほしいこと」「看護基礎教育で習得すべき項目」で優先順位の高かった内容、研究協力者会議で語られた教育上の直面している困難をまとめてみると、図1に示すように、「人間としての成長・成熟度」「看護技術（知識・技術・態度）」「看護実践能力」の3つのコアとなる概念を取り上げることができる。

「人間としての成長・成熟度」は、学生自身が看護への関心を持ち、自ら学び成長していくことである。そこには、自律性や主体性、対人関係能力、倫理の問題が含まれている。

「看護技術（知識・技術・態度）」は、学内での学習と大きく関わっている。情報社会のなかで知識量は膨大になっているが、それを使い自分のものにしていく力が十分でない。これは看護教員の教育力の問題とも大きく関わっている問題である。

「看護実践能力」の習得は、看護基礎教育における特徴的で最終の目標である。看護実践能力を習得するためには主体性や高い倫理性をもった人間としての成長が基盤になり、そこから看護に必要な知識、技術・態度を養うことができれば、臨地実習を通して看護実践能力を習得していくことができると考えられる。また、看護実践能力を習得していく過程で、看護技術や知識を自分のものとして習得し、看護実践を通して人間としての成長を図っていく。この3つのコアとなるものが連動して1人の看護師として成熟していく。これが看護基礎教育の基本であると考えることができる。

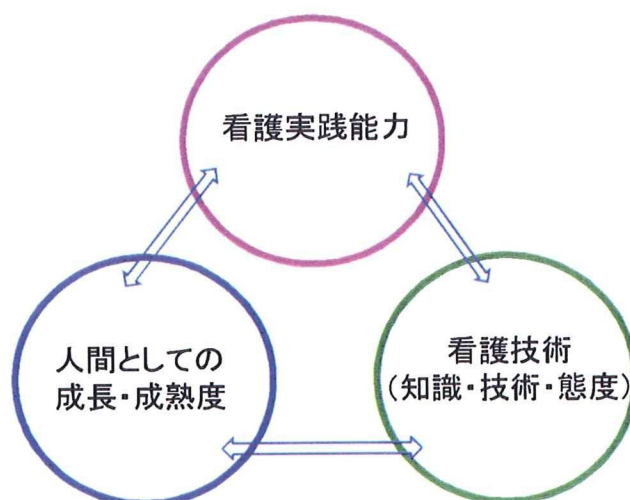


図1 看護師教育のコア

5. 今後の課題

本年度は、看護学校における看護基礎教育の実態と看護教員が重要視している教育内容を抽出することに重点をおき、資料を作成した。記載された内容の分析は、まだ十分に洗練されたものではないが、この資料を基に次の段階としては、さらに内容分析を丁寧にするとともに、デルファイ法などの研究方法を用いながら、コアとなる概念を抽出してカリキュラム作成に向かっていく予定である。

看護基礎教育においては、カリキュラムを変えてもカリキュラムを構成している概念の理解や教育方法の改善がなければ、教育は変化していかない。そのために、本研究では、本研究のプロジェクトメンバーとして参加する看護学校教員の協力を得ながら、目標にたどり着きたいと考えている。とくに、看護学校教員による研究協力者会議は、現状把握と今後の方向性を検討する上では重要であった。看護学校教員の教育力を増しながら、カリキュラムの検討ができるような研究方法の開発も同時に目指していきたいと考えている。

<引用文献>

- 1) 中山洋子, 看護教育におけるパラダイムの転換, 看護 51(4):48-56, 1999.
- 2) Tanner, Christine, 学習者の個別性に応じた看護教育, 日本看護学教育学会, 10(3):39-49, 2000.

<研究協力体制>

研究協力の看護学校 115校

研究協力者(看護教員) 277名

研究協力者(福島県立医科大学看護学部)

星野聡子・伊藤佳美・大川貴子・横田素美

資料 1. 研究協力者の背景

1. 看護師としての臨床経験

最小： 3年

最大： 33年

平均：11.2年

年数	人数:175
5年未満	11
5年以上10年未満	56
10年以上20年未満	97
20年以上	11

2. 看護教員としての教員経験

最小： 1年

最大： 32年

平均：12.3年

年数	人数:175
5年未満	26
5年以上10年未満	37
10年以上20年未満	83
20年以上	29

3. 専門領域

領域	人数:175
基礎看護学	58
成人看護学	26
小児看護学	14
母性看護学	17
老年看護学	18
在宅看護論	19
精神看護学	22
なし	1

2つの領域をもつ者	人数:11
基礎看護学+成人看護学	7
基礎看護学+母性看護学	3
基礎看護学+在宅看護論	1

*2つの領域をもつ者は最初の記載とした。

資料 2. 教育のなかで最も大切にしていること

質問：看護学校 3 年課程の教育のなかで、あなたが最も大切にしていることは何ですか。
 (対象者数：175 人、複数回答)

大項目	データ数: 491
学生の成長	89
学生の学び	65
対象理解	61
看護技術に関すること	55
看護への関心	52
教員が大切にしていること	49
根拠に基づく実践、EBN	48
対人関係に関すること	24
コミュニケーション	16
意見の表出	12
倫理観	9
その他	11

〈各大項目毎の内容〉

学生の成長	データ数: 89
人間性	21
自主性、自律性	15
学生の感性	9
誠実さ	8
学生の成長	7
学生の自己洞察	6
基本的態度	4
自己の確立	4
学生の情緒の安定	3
社会性	3
責任感	3
協働する能力	3
自己と相手の尊重	2
その他	1

学生の学び		データ数:65
自己学習力		30
継続した学習		8
考える力		7
探究心、向上心		7
学ぶことの楽しさ		4
創造力		3
現象に疑問を持つ		2
自己研鑽		2
知識の活用		2

対象理解		データ数:61
対象の理解		13
思いやる気持ち		11
人間の尊重		10
関心を寄せる		8
患者にできることを考える		5
相手の立場に立って考える		4
人を大切に思う心		4
人に寄り添う		3
共感する		2
その他		1

看護技術に関すること		データ数:55
知識技術		14
看護技術の習得		12
看護実践能力		11
知識の習得		7
安全安楽な援助		5
アセスメント力		5
その他		1

看護への関心	データ数:52
看護の楽しさを実感	13
看護観	7
看護師としての自覚と責任	6
看護とは何か	6
看護への興味、関心	4
看護の心	3
現象の意味づけ、学び	3
専門職業人	2
看護師への動機	2
看護の可能性	2
その他	4

教員が大切にしていること	データ数:49
学生の意思の尊重	7
看護、人間について伝える	7
学生の良い面を引き出す	4
教え方について	3
学生の価値観の変容	3
学生の成長を信じる	3
ともに学ぶ姿勢	3
学生との信頼関係	2
考えさせる	2
教員がモデルとなる	2
社会に貢献できる人材の育成	2
その他	11

根拠に基づく実践、EBN	データ数:48
根拠に基づいた実践	14
論理的思考	13
判断力	8
問題解決能力	7
看護過程展開力	3
根拠の明確化	2
その他	1

対人関係に関すること		データ数: 24
人間関係能力		6
関係の構築		6
他者への配慮		6
人間関係		4
相互関係		2

コミュニケーション		データ数: 16
コミュニケーション能力		15
その他		1

意見の表出		データ数: 12
自分の意見を表現できる		9
他者に相談、助けを借りることができる		2
他者の意見を聴ける		1

倫理観		データ数: 9
倫理観		5
倫理的判断と行動		2
倫理に基づいた看護実践		2

資料 3. 卒業時の到達目標

質問：あなたが考える学生の卒業時の到達目標を5つ（5つ以内）あげてください。

（対象者数：175人、複数回答）

大項目	データ数：951
根拠に基づく看護過程の展開／問題解決過程	127
看護技術、知識に関すること	110
学生の人間性に関すること	105
継続的な学習／主体的学習	95
コミュニケーション能力	80
看護の役割、責任の自覚／看護師の姿勢	71
対象の理解／統合的に理解する	67
人間の生命／尊厳の尊重	61
倫理観	54
チームの一員であることへの自覚・役割の理解／他職種との連携	53
看護観	28
看護への関心／看護師になることへの希望	20
社会へ目をむける	14
基礎知識／能力	12
医療安全に関すること	9
社会人としての自覚／能力	8
成績／学力に関する項目	8
その他	29

〈各大項目毎の内容〉

根拠に基づく看護過程の展開／問題解決過程	データ数：127
科学的根拠に基づく看護過程の展開	45
個々の健康レベルに合わせた看護過程の展開	32
問題解決能力／問題解決過程	28
アセスメント力	13
看護過程の展開ができる	9

看護技術、知識に関すること		データ数: 110
基本的な看護技術、知識、態度		67
安全・安楽な看護技術		22
根拠に基づく看護技術		13
個人に合った看護技術		7
フィジカルアセスメント力		1

学生の人間性に関すること		データ数: 105
自己理解、自己洞察		24
思いやりの心、行動		12
豊かな人間性		11
豊かな感性		10
対象を理解しようとする態度		9
自分で考え、行動できる		5
看護に必要な人間性		4
向上心		4
探究心		4
主体性、自律性		3
誠実性		3
他者を尊重できる		3
忍耐力、精神力		3
協調性		2
自己成長		2
真摯に取り組む姿勢		2
できること、できないことが判断できる		2
人としての道徳		2

継続的な学習／主体的学習		データ数: 95
主体的学習姿勢		39
研究的態度		12
問題解決力		9
継続的な学習		8
自己研鑽		8
生涯学び続ける姿勢		6
自己教育力		4
自己成長		4
探究心		3
その他		2

コミュニケーション能力	データ数:80
コミュニケーション能力	28
円滑な人間関係の構築	21
自分の考えを伝えられる	11
報告・連絡・相談ができる	7
自己を理解し他者を尊重した上での人間関係の形成	4
援助的人間関係を形成	3
共感的態度	3
その他	3

看護の役割、責任の自覚/看護師の姿勢	データ数:71
看護師としての姿勢	35
看護職としての自覚と責任	28
看護の役割	8

対象の理解/統合的に理解する	データ数:67
人間を多側面から全人的/統合的に理解する	37
対象を理解できる/理解しようとする姿勢	24
人間を理解するための知識/能力	6

人間の生命/尊厳の尊重	データ数:61
個々の人間を尊重する	34
生命を尊ぶ/生命の尊厳	21
人間としての尊厳を守る	6

倫理観	データ数:54
倫理に基づいた行動	33
看護師としての倫理観	14
倫理観	7

チームの一員であることへの自覚・役割の理解/他職種との連携	データ数:53
チームの一員として連携/協働する	34
チームの一員として看護の役割を認識する/果たす	19

看護観	データ数:28
看護観を明確にできる/表現できる	20
自己の看護観をもつ	8

看護への関心／看護師になることへの希望	データ数:20
看護への関心	12
看護への魅力、希望	8

社会へ目をむける	データ数:14
社会の変化へ対応する/関心をもつ	7
広い視野で看護を考える	5
国際的な視野をもつ	2

基礎知識/能力	データ数:12
基礎的な知識/能力	12

医療安全に関すること	データ数:9
医療安全に努める	5
医療安全に関する知識・技術	3
医療安全への関心	1

社会人としての自覚/能力	データ数:8
社会人としての教養、マナー	4
社会人としての責任、自覚	2
社会人としての適応力	2

成績/学力に関する項目	データ数:8
国家試験に合格するための学力	6
卒業レベルに達する	2

その他	データ数:29
実践能力に関すること	13
自己の心身の健康管理ができる	6
看護における学び、人間的な成長	5
赤十字の理念、活動の理解	2
その他	3